

の普及が急速に進んでいますが、個人でデジタルカメラのプリント処理までされている方は最後までその作業を大事にしてほしいものです。今後デジタル技術が進歩することにより、モノクロームの持つ独特な味わいや雰囲気のある写真表現が多様化され、それは将来の写真展展の第一部「自由」での普及の兆しが見えてくると思います。

胸を打つようなスナップ

■山下 智

審査にあたって主催者・審査員はどうしても作品に新鮮さを求めます。ですから、いかに優れた作品であっても、それに類する入賞作品が過去にあれば上位入賞は難しく、場合によっては選外になるようなことがあるのも事実です。「コンテスト」故抱える一面です。また、それらの傾向を見て応募者が斬新な作品作りを追求するのも理解できる話ではありません。そのせいかどうか定かではありませんが、近年の応募作品に色・形・珍しさなどに視点を置いたような表層的な作品が以前に比べ多くなったように感じています。そんな想いは私だけでしょうか。

昨年の「第一部(自由)」の作品をみると、スナップ(ここでは人物スナップ)が占める割合は入賞作品でおよそ三十五%、応募作品全体では更に低い数字になると感じています。全国的な写真コンテストの中でも低い方の数字だと思いますが、北海道人の気質も影響しているのでしょうか。もちろんスナップがすべて良いという話ではありませんが、スナップ大好き人間の審査員から期待感を書かせてもらおうと、写真に目新しさはなくても内容のある、胸を打つようなスナップ作品が多く応募されることを期待しているところです。

第五十回展の西澤さんの大賞作品「親爺のオシャレ」は内容が深く、記憶にも新しいところですが、私にとっても印象的な審査会でした。それは過密な審査スケジュールの中にあつて同展審査委員長であった大西みつぐ先生が「親爺のオシャレ」を大賞に引き上げるまでの審査の

様を目的に当たりにして、審査員に眼力と集中力とエネルギーが必要なことを思い知らされました。良い作品を見落とすことがないように、私も頑張ります。

第二部 観光・産業

■田嶋 英夫

産業に立ち向かう人達を

第二部では「観光」及び「産業」と視点の違う部門を募集している事でとまどう方も多いと思います。しかし、北海道の場合は密接に関係している部分が多いのも事実です。特に美瑛や富良野などの広大な畑作地帯はその典型です。作品作りで大切な点は「人との関わり」方を表現のポイントに据えて欲しいということです。近年の北海道の産業に関しては厳しい状況にあります。新規就農や付加価値に活路を見出した新たな視点で産業に立ち向かう若者も沢山います。「働く人達」から「前向きに産業に立ち向かう人達」をクローズアップするのも良いと思います。

一方、観光に関しては近年北海道は海外からも注目を集めており、有名観光地では外国の観光客を目にするのも珍しくありません。作品作りで一番大切な事は、作品に表現された所に「行つて見たい!」との魅力を表現する事です。やはりここでも家族、若者、熟年など多くの観光客が楽しく集う視点が大切なポイントになります。有名観光地ばかりではなく、近くの人達が大切にしている風景もあるでしょう。一枚の写真が多くの観光客を集める観光地となることでもあります。有名観光地ばかりが表現手段ではありません。その地に住む人だからこそ撮影する事ができた写真を期待します。また、審査の時、前年に入賞した作品を参考にした応募作品が多いのが目に付きます。審査ではあくまでも

「新たな表現」や「視点」に注目します。人まねではなく自分なりの「表現」にこだわりと自信を持ってください。その事が多くの応募作品から抜け出すポイントです。今年も大いに期待を持って作品審査にあたります。

第三部 ネイチャーフォト

■奥野 時夫

付加価値が必要条件

そもそもネイチャーとは「自然」自然とは辞書によると「自ずからそうなっている様、天然のままて人為の加わらない様、人力によって変更規制、形成されることなくおのずからなる生成展開によって成り出でた状態」とある。すなわち森羅万象あるがままとのこと。写真界では北海道はネイチャーフォトの天国といわれ、道展においてもネイチャー部門での作品の多さでもうなずける。しかし、人間の手を加えた環境で撮られた作品も多く見られる。例えば、カワセミ、シマフクロウ、リス等止まり木を立てエサ場を作り誘導して撮っている。セツピングした場所で撮影すると、たしかに見た目には綺麗で素晴らしいが、なにか自然ではない違和感を覚える。感動が伝わってこないのである。

実際に撮影となると非常に大変なこととは思いますが、ただそこに動物や、鳥、花がいたというだけの写真では、共感と呼べないと思う。やはりなんらかの付加価値が絶対必要条件となる。例えば周囲の自然、状況を最大限に生かすこと、光と影、色、形や動感、感情など。自然でなければ得られない感動が必ずどこかにはあるはずである。私自身、すべてのジャンルで写真とは感動の表現であるをモットーにしていて。感動は個人差が非常に大きく風景であれネイチャーであれ一言ではいきれないが、少なくともシャッターを切る瞬間は誰しも感動を覚えているはず

である。それをいかに作品に表現するかが重要であり、またそれを見た人が、いいなーと共感してもらえれば成功である。これはどの部門でも共通していることだろう。残る期間感動を求めて頑張ります。

■駒井千恵子

バラエティに富んだ花の写真も

自然は人間にとってかけがえのないもの、その大切なものを写しとったのがネイチャーフォトです。豊かな自然に恵まれた北海道には、身近なところに被写体がたくさんあるように思います。空には雲が流れ、太陽や月や星空、海や川、道端には草花が可憐に咲いています。そんな自然を撮るためには、まずその自然に感動し、好きになることだと思います。そしてカメラを向けた被写体と出会ったら、まずはシャッターを押してみよう。動きのある動物でも花のような動きの少ない被写体でもよく観察することで、魅力を引き出しドラマチックに撮ることができるのではないのでしょうか。

道展での応募作品をみますと、ネイチャー部門は圧倒的に野鳥の写真が多く、昆虫や大型の動物も被写体になっています。応募作品が多ければ、見方が厳しくなるのも当然です。風景では同じ場所を撮った写真が重なることもあり、せっかく素敵な写真であっても選に漏れることがありますから、やはり、独創的な作品が求められます。目新しい作品には、選者の目が集中します。また、同じ自然でありながら花の写真はとも少ないように思います。まして身近な野草を撮った写真はまれにしかありません。花をライフワークにしている私としては、バラエティに富んだ花の写真を見せていただきたいと思っています。そして私もその作品から学ばせていただきたいと思います。ネイチャーは撮るだけでなく、作品にして人に見てもらおうことで、素晴らしい自然を多くの人に知っていただく機会になります。それが自然を大切にすることに繋がってきます。一石二鳥です。